

「小学校における国際理解教育」
～総合的な学習の時間・英語活動・造形教育からのアプローチ～

山口県山口市立平川小学校 辻本 紳一郎

小学校現場における国際理解教育は、総合的な学習の時間の登場と共に、教育課程における位置付けがより明確化されてきたように思う。しかしながら、国際理解教育を単発な国際交流活動としてトピック的に扱うことで、子どもの「学び」が見えにくくなったり、教科学習との関わりを問われたりすることも未だ少なくない。あるいは、一部では、英語活動を実施することで、国際理解教育の実践に替えているというような学校もあると聞く。

そこで、小学校における国際理解教育のあり方について、いくつかの実践をもとに考えてみたい。

I 総合的な学習の時間における国際理解教育

～「地球市民の一員としての実感をもたせる」ために

1 「手をつなごう 私たち地球人」(6年総合95時間の年間テーマ)

～1学期の単元「平和の鐘を響かせよう」の実践を通して

6年生が1学期の総合で取り組んだ単元である。もともとは、広島への修学旅行をメインに、本校においてカリキュラム化されていた平和学習を発展させたものであるが、個人的には、子どもたちが原爆について調べることで戦争について「知ったつもり」になることや、戦争を解決するというおおよそ自分たちの生活とかけ離れた大きなテーマに取り組むこと、また、「平和な世の中とは戦争のない世の中」と短絡的に結びつけて考えてしまうことの危険性について同調できない部分があった。

学校において総合の単元がある意味固定化されるということは、新しくその学年を受け持つ担任の負担軽減や、全校の系統性を考える上では有効なことであるが、新しくその学年を受け持つ教師の願いや子どもの願いや実態、また、社会の要請等を併せ考えると、問題点も少なくない。


そこで、今回は、広島への修学旅行という行事に際して子どもたちがいろいろな調べ学習や聞き取り、また、そのまとめをする活動の中で出会う様々な課題を年間テーマに結びつけることを考えた。つまり、1学期でこの単元を終結させてしまうのではなく、せつかくの追究活動を年間を通じての課題追究の出発点にしたのである。

単元のねらいは、以下の通りである。

- ◎ 自ら見出した課題を友達と協力しながら、参考図書やインターネットを利用したり、被爆者の方の話を聞いたりして、主体的に追求していくことができる。
- ◎ 修学旅行や課題追求活動を通して、戦争の悲惨さと平和の大切さを学び、身近な人々や世界の平和と幸せを願う気持ちや態度を身につける。
- ◎ 平和学習を通して学んだ視点をもとに、自分たちの身近な生活を見直し、自分たちにできることは何かを考えるとともに、実行しようとする。
- ◎ アメリカの人たちとの交流を通して、「平和」についてより広い視野で見つめることができる。

単元の流れをまとめたものが下の表である。なお、ここでの評価の観点を次のように考えた。

- 【課題を見つける力】： A 【課題を追求する力】： B
 【表現する力】： C 【人と関わる力】： D
 【生活に生かす力】： E

「平和の鐘を響かせよう」			
5月上旬(2)	○ 戦争に関わる歴史について学ぶ「15年におよぶ戦争」：教科書や資料集をもとに～アウトラインを学ぶ A	社「15年におよぶ戦争」 国「ヒロシマのうた」	課題づくり1
5月上旬(2)	○ 広島で起こったことについて学ぶ。：資料をもとに。 A・B		
5月中旬(1)	○ ウエビングにより、「平和」についての自分たちの考えを広げながら、追求への視点を明確にしていく。 A		
5月中旬(1)	○ 平和について考え、追求してみたい課題を考える。 A		
5月中旬旬	○ 各自の課題解決のための活動を行う。 ・ 祖父母への聞き取り ・ 戦時中のもを集める ・ 参考図書で調べる ・ インターネットで調べる ・ 折り鶴作り（全校や地域の人にも呼びかける） B・D		
5月21日 22日	○ 修学旅行に行き、広島で原爆の悲惨さや平和の尊さについて学習する。 (資料館見学・平和公園ウォークラリー) A・B・D	行事：修学旅行	課題づくり2
26日(1)	○被爆者である漁田さんの話を聞く。 B・D		
(1)	○各自で調べたものを持ち寄り、グループ分けをするとともに、それぞれのグループでの情報交換をもとに、さらなる追求の方法を話し合う。 A		追求2
(3)	○グループごとに課題解決のための活動を行う。 ・ 聞き取り ・ 参考図書で調べる ・ インターネットで調べる B・D		
5月下旬～6月下旬	○ 自分たちで調べたことや、修学旅行で学んだことをもとに、テーマごとのまとめ（新聞）を作る。 C・D		まとめ1
		図：「韓国のともだちの絵を	

	→中間報告会 →「平和コーナー」に掲示発表	鑑賞しよう」	
7月上 旬	○ 「アメリカの先生たちと交流しよう」 交流会について知り、自分たちの課題を持つとともに、 会に向けた準備をする。 A・B		課 題 づ くり 3
7月 13日	○ 「アメリカの先生たちと交流しよう」 異文化への理解を深める。また、平和についてのイン タビューをし、共に考える。 B・C・D		
7月下 旬	○ 単元を通して学んだことをもとに、自分の考えをま とめるとともに、課題追求のための準備をする。 A・D・E		

7月13日には、アメリカの教員視察団の学校訪問と関連づけた交流活動を行った。6年生の子どもたちにとってのアメリカは、やはり人気のある国であり、英語活動で親しんできた国でもあり、同時に、原爆を投下した国、でもある。交流活動では、それぞれの課題に応じたグループ分けを行い、準備を進めることとなったが、中でも「アメリカの人たちと一緒に平和について考えてみたい」という思いを持った子どもたちが多かったことが印象的であった。

以下は、この国際交流活動の流れをまとめたものである。

「アメリカの先生たちと交流しよう」

◆ 教育課程における位置づけ

「総合的な学習の時間」 14M (交流会：4M、準備等：10M)

◆ ねらい

- ・ アメリカの人たちとの交流会を通して、アメリカの文化や自国の文化についての理解を深める。
- ・ アメリカの人たちとの考え方の異同について意識しながら交流会を進める中で、国際的な視野を養うとともに、英語によるコミュニケーションに対する興味を高める。
- ・ 「総合的な学習の時間」に設定した自分たちの課題追求活動をインタビューという形で実施することにより、世界の平和と幸せを願う気持ちや態度を身につける。

◆ 評価の観点

【課題を見つける力】 アメリカの人たちとの交流会を通して、新たな課題を見つけることができる。

【課題を追求する力】 自分たちの課題追求のために、主体的にインタビューに取り組むことができる。

【表現する力】 外国から来た人たちに伝わるように、自分の思いをわかりやすく自分の言葉で表現することができた。

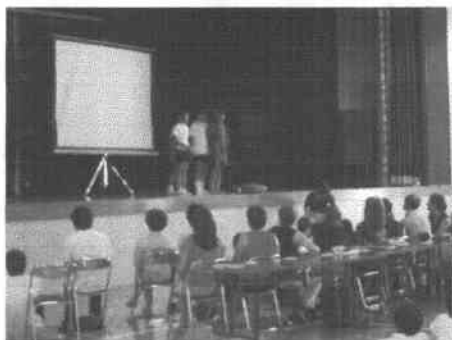
【人と関わる力】 交流会やインタビューを通じてアメリカの人たちと意欲的に関わり、相手の思いを尊重しながら話したり聞いたりすることができる。

◆ 当日までの主な流れ

アメリカ教員団の学校訪問について知る。	
アメリカ合衆国やバーモント州・NYについて簡単な情報を得る。 1M	
交流会を開くことを計画し、それに向けた自分たちの課題を持つ。 2M	
交流会に向けた準備を進める。 6M A 日本文化の紹介チーム（調べ学習や事前準備・練習など） B 「アメリカの人たちへの質問チーム （アメリカについての調べ学習と質問の準備） C 「平和」についての質問チーム （自分たちの課題に沿った質問を考える。） D 英会話に挑戦チーム（調べ学習・事前準備・練習） ※ 司会や日本文化の紹介なども児童が行うよう支援する。	
アメリカの人たちとの交流会をもつ。（7月13日） 4M	
交流会を通して学んだことをまとめ、次の課題作りのきっかけとする。 1M	

【活動の様子】





平和についてのインタビューをした子どもたちは、ストレートに「広島にある原爆ドームに行かれて、どんなふうに感じましたか。」と尋ねていた。それに対し、アメリカの先生たちは、「とても悲しいと思った。」と話された。また、ひめゆりの塔について知らないという先生たちに、自分たちがまとめた学習の成果を発表する子どもたちもいた。「世界から争いをなくすために何をしたらいいと思いますか。」という子どもたちの質問には、アメリカのある先生が「世界中の人々が仲良くなれるような取組みを続けていくことが大切だと思う。そういう意味で、今日のような国際的な交流会を開くことはとても有意義だと思う。」と話された。

会の最後に、あるグループが「日本人は今、平和な世の中になるよう努力していますが、アメリカでは平和になるようにどんな活動をしていますか。」という質問をした。それには、「戦争反対という意志を強く持つようにしている。そして、平和な世界になるように、9月に行われる大統領選挙では、戦争のない平和な世界を築くことのできる候補者を選ぶようにしないとイケないと考えている。」と答えられた。

いずれにしても、子どもたちの真剣な態度にアメリカの先生たちも大変感銘を受けていたようだった。一つ日本の子どもたちが真摯な態度で平和について考えていることに感動された先生もいたようだ。

(子どもたちの感想から)

- ☆ 交流会で、日本の文化を伝えられてよかったと思いました。アメリカの人に自己紹介を英語でできたこともうれしかったです。昔、日本とアメリカは戦争をしていたけれど、今は仲良くこういう交流会ができるのですばらしいと思います。
 - ☆ アメリカの先生たちは、やさしくてみんなととてもなかよくしていたので、「アメリカの人はこわい人たち」と思っていた気持ちが変わりました。アメリカの人たちとやったゲームはとても楽しかったです。またみんなとやってみたいです。
 - ☆ ほかのグループがインタビューしていたとき、アメリカの人たちが「戦争には反対です」と言ってくれたので、とってもうれしかったです。またいつか今日みたいな交流会をしてみたいと思いました。
 - ☆ アメリカの先生方は、広島の前爆のことを聞いたとき、心をいためていたように私は感じました。先生の一人が「日本は平和のことについて深く考えていらっしゃいますね。アメリカの人も見習いたいです。」とおっしゃっていました。この言葉が心に残りました。
- 給食時には、給食当番が仕事をしているところをカメラで撮られていました。とてもめずらしいと思ったのでしょうか。それと、上ぐつにもおどろいていたようでした。毎日当たり前にしていることでも、国によって違うんだなあ、と思いました。

■ 実践をふりかえって

今回の活動で時に配慮を要したのは、インターネットによる調べ学習である。特に戦争についての記述は、情報の作成者の思いや考え方で大きく左右される。記述も小学生には難しいものが多かった。教師がしっかり関わる必要がある。

また、安易にインターネットに頼る子どもたちには、何を調べたいかを具体的なレベルまで検討させることが大切である。そうする中で、検索するキーワードを吟味することができてくるだろうし、それを調べるためにどのような方法が最適あるかを再検討することも可能となる。

また、それぞれの子どもたちが様々な場所で様々な活動を行うこうした学習では、個々の子どもたちの姿を見取ることが難しくなってくる。そのため、今回は、その時間における評価の観点を具体的な子どもの姿にまで下ろしたものを記した学習カルテを活用した。また、場合によっては、子どもの学びの流れやその中でのつまづきなどを発言やポートフォリオ、感想、まとめた資料などから読み取り、ピンポイントで関わっていく必要性もある。

いずれにしても、評価は子どもに返すためにある。(支援へとつながるべきものである。)

また、教科との関連づけを重視するあまり、不自然な単元の入替え作業を行ったり、本来の単元目標を変えてしまう必要も生じることがないように配慮したい。

さらには、学習活動を進める上で必要となるスキルとしてどのような学びが必要であるかを吟味し、教科・領域との関わりを考慮しながらカリキュラムを組み立てていくことが今後の課題となろう。(書く力・読む力・PCスキル・調べ方・描く力・まとめる力・基礎的な資料収集能力等)

今回は、保護者に子どもたちの学びの姿を伝えていくことにも配慮した。総合における学びについて理解してもらい、同時進行で子どもを見つめていくことが大切であると考えている。

さて、この単元における課題追究の入り口は「平和」というテーマであった。広島への修学旅行は、平和というものについて子どもたちが真っ正面から考えたり、課題意識を広げたりするよいきっかけとなった。しかし、それは同時にそこから国際理解・環境・郷土へと広がっていく可能性をもつものである。

平和についての追究活動の中で、子どもたちの目は確実に世界へと向けられ始めた。また、子どもたちの中から「戦争がなくなりさえすれば、本当に平和が訪れるのだろうか」という疑問が出された。調べ学習の時に会った食糧問題についての本がきっかけだったようだ。

そこで、2学期の単元名を「手をつなごう 私たち世界の子ども」※とし、社会科の「世界の中の日本」とのクロスカリキュラムや、開発教育の視点で、「平和」についてより広い視点で考えていくことになった。海外青年協力隊OBやNGO関係者を招き、話を聞いたり、ワークショップに参加する中で、世界で起きている不条理について考え、自分たちの生活を改めて見つめ直すような場を持つことができれば、とも考えている。(※添付資料参照)

こうした活動の中で、ユニセフ等の国際機関の平和への努力や国と国との国際協力の現状を知るとともに、平和は地球上のすべての人々の願いであるということや、地球に住む同じ人間として助け合い協力することが大切であるということにも気づかせたい。

そしてまた、3学期に向けて、6年生の子どもたちが「地球人としてできること」について考え、できることから実行するような活動になれば、と願っている。

つまり、21世紀を生きる子どもたちには、地球規模で考える視点を持ち、自分たちの当たり前を見直し、自分たちの生き方を見つめなおし、さらには地球市民として足元から実行していくといったことを期待するものである。

■ 地球市民として考える、ということについて

子どもたちに、自分たちの身の回りのものについて気をつけて見せると、衣食住すべてにおいて、自分の生活が諸外国とのつながりの中で成り立っていることに気づくであろう。自分の衣服がアジアの国々からやってきたものであったり、おやつのパテトチップスがアメリカ製だったり、台所用の洗剤がベルギー製だったり、おでん用のすじ肉がオーストラリアの牛だったり……。こうした発見が子どもたちの外国への興味をかきたて、また、自分たちの生活を見つめなおすきっかけにもなると考える。

数年前に、5年生の社会で、「ロブスターの旅」という授業をした。山口市のスーパーで売られているロブスターや、近くの結婚式場の広告に載っているロブスターが、西オーストラリア州のパースから送られてきている、ということに目をつけ、ロブスターがどこからやってきたのか、を時間を逆もどりしながら追究していく授業である。西オーストラリア州北部のランセリンという港町で獲られたロブスターがパース空港から運ばれてきていることを調べる中で、「食べられればそれでいい」、と考える現地の人たちと、「生きたまま、ひげも足も折れていない色のきれいなロブスターを食べたい」という日本人との考え方の違いに苦勞する商社の人たちのことや、そうしたロブスターを日本まで運ぶために様々な人々がいろいろな工夫をしていることが分かり、大変興味深い授業となった。また、日本と同じようなかまぼこがオーストラリアでも売られていることや、それには、オーストラリアの人々の好みの味がつけられている、ということを知る中で、いろいろなものの考え方の違いはあっても、どちらが正しいというのではなく、それらを違いとして認めていくことの大切さについても考えるきっかけができたように思う。あわせて、ロブスターの捕獲に厳しいきまりを作り、海洋資源の確保に努めるオーストラリアのような国がある一方で、乱獲をしながら、その日その日の暮らしを成り立たせている国があることなど、様々な問題にも気づくことができた。

私たちの生活は、多くの国々とのつながりを持ちながら成り立っている。同時に、その中における問題にも目を向けさせることが大切である。たとえば、環境問題は、現代人が未来人に対しての加害者になったり、先進国の人間が開発途上国の加害者になったりするものであり、時間や空間を超えた地球人としての問題がそこに見えてくる。

これは、食料問題についても同様である。牛を1キロ太らせるために必要なトウモロコシで、飢えに苦しむ人たちの命をどれだけ救えるか、ということから授業を展開させることもできる。

とは言え、小学生である子どもたちが、問題を解決することは当然困難である。「地球規模で考えながら、今の自分にできることを足もとから実行できる」ことが大切である。たとえば、つけっぱ放しの電気を消そうとすることから始めてもよいのである。国際理解教育において大事なことは、こういった問題について「気づかせ、継続的に考えさせる」ことであると考える。

2 「手をつなごう 私たち地球人」(6年総合95時間の年間テーマ)

～2学期の単元「手をつなごう 私たち地球の子ども」の実践より

① 「世界が39人の村だったら…」(6年道徳・総合)

「世界がもし100人の村だったら」という本をベースに、ワークショップ形式で組み立てた授業である。まず、現在の人口63億人が50年前にどうだったか、また、50年後にはどうなるかを三択問題を通して考えた。それぞれの答えが25億人と93億人であることに、子どもたちも大変驚いていた。

次に、世界の人口約63億人をクラスの人数39人に見立てた場合、男性と女性の割合がどのようになるか、また、世界の中での老人の割合と日本の中での老人の割合をそれぞれ女子・男子の中における割合に置き換えるとどうなるか、という活動を通し、そこにどんな問題が生じるかをみんなで考えた。

また、アジア・アフリカ・ヨーロッパ・北アメリカ・南アメリカ・オセアニアのグループごとに人口比に基づいて分かれてもらい、それぞれの大陸の面積比の√の比率から算出した長さのロープの中に入れてもらった。アジアグループでは、25人もの子が1つのロープの中でぎゅうぎゅう詰めになったが、それに比べて、その他の地域が広々としていること、開発途上国を多く含むアジア・アフリカの人口密度が極端に高いことなどを体感しながら、そこに生ずる問題について考えた。

(授業後の感想より)

- 世界の人口が100人だったら、たとえと、大きな数で考えるよりもとてもわかりやすく勉強することができました。わたしは、アジアグループでしたが、ロープがとても短いなあ、と思いました。アジアの人たちは、せまいところに住んでいるんだなあ、と思いました。
- 自分たちがどんなに幸せなのかがよくわかりました。世界の人口が50年間に25億人から63億人に増えたことにもびっくりしました。同じ地球に生まれた同じ人間なのだから、人間は公平でないといけないと思います。
- この授業で分かったことは、世界には食べ物も食べられない人がいるのに、食べ物を残したりするぼくたちは、すごくぜいたくだということです。
- 世界の人口がアジアとアフリカの人なんだなあ、と思いました。この授業でぼくの知らなかったことがかなりわかりました。楽しかったです。
- アジアとかアフリカが世界の人口の50%もしめているとは知らなかった。生きることがすごくありがたいということを改めて思った。

② 「室町文化祭」(6年社会・総合)

社会科の発展学習である。今もわたしたちの生活に受けつがれている室町文化について調べ、茶の湯・生け花・水墨画などを実際に体験する活動を通して、今もなお多くの人々に親しまれている室町文化の歴史的意義について関心を持つことをねらいにしたものである。会に先立って、子どもたちは1学期に学んだ室町文化について再度調べ学習を行った。そして、その中で自分が興味を持った文化を実際に体験してみる活動を仕組むに至った。今回は、「茶の湯」「生け花」「水墨画」を体験することになり、計8名の地域の先生方を学校にお迎えして行った。



それぞれの子どもたちが楽しみながら、今に生きる室町文化を体験し、日本の文化について、様々なことを学ぶことができたようである。

③ 「フォトランゲージで世界を知ろう」(6年総合)

いろいろな国の写真を使った授業を行った。それぞれのグループにその国の特徴を表す写真を配り、その写真から感じた印象や意味を話し合ってもらうものである。フォトランゲージとよばれる手法である。今回は、意見を出しやすくするために、それらを新聞記事にする、という方法をとってみた。活動のあとで、1枚ずつ写真を提示しながら、子どもたちの記事の紹介と写真の解説を行った。いろいろな国の意外な生活に子どもたちも驚いていたようだ。



子どもたちは、楽しみながら、いろいろな国についての関心を高めることができたようだ。また、同じ地球に住む人々の様々な生活について興味を持った子どもたちも多かったようである。子どもたちの興味・関心は、その後の課題に結びついていった。

【授業後の感想から】

- いろいろな国のことを知ることができてうれしかったです。私はあまりいろいろな国のことを知らないの、これをきっかけにいろいろな国のことをもっともっと調べようと思います。地図をぱっと見て、調べたい国がわかるようにもなりたいです。
- いろいろな国の様子が分かってよかったです。地雷がうまっている国もたくさんあることを知って、改めて地雷は怖いものだということがわかりました。私が見知らないことや初めて見たところなどが見られて、すごく良かったです。
- 写真を見てどこの国かを考えたり、どんなことをしているかなど、日頃考えないことを考えることができました。国を形だけであてたりするのも難しかったけど、できました。
- 思ったよりも難しかったです。写真は1枚でも、みんな違う考えだったので、おもしろいなあ、と思いました。国が違うだけだけど、こんなに環境が違うとは思わなかったです。
- 写真を見てどこの国かを考えたり、何をしているのかとか、どういうところなのかを考えたりするのがとても楽しかったです。いろんな国の問題や町の様子など、いろんなことがわかってとても楽しかったです。またやってみたいと思いました。
- この活動を体験して、いろいろな国の特徴や行事、乗り物や商売などいろいろなことがわかりました。まだまだいろいろな国があるので、もっともっと調べたいです。フォトランゲージはとても楽しくいい勉強になりました。
- いろいろな国がよくわかりました。他の国の行事がよくわかりました。またやってみたいと思いました。今度は自分で進んで調べてみたいです。
- 各国の写真を見て思ったことは、1つの国の写真をいろいろな方向で見ると、いっぱい想像できることです。写真を見て何かを考える、感じる、想像するということが学べた気がします。とても楽しかったです。

④ 「もし、あなたがアボリジニだったら…」(6年道徳・総合)

「アボリジニのものの見方で考える」という授業を行った。アボリジニアートの鑑賞を発展させた学習である。

イギリス人たちにとって、大変な航海の末、やっとたどり着いたオーストラリアは、新たな希望を見出せる新天地であった。彼らは、砂漠や森を開拓し、血のにじむような苦勞をして少しずつ町を作り上げていった。その社会のルールをたやすく破ってしまったアボリジニたちは、当然、イギリス人たちにとって、喜ばしくない先住者であったろう。

当時の社会背景は現在と大きく異なり、イギリス人たちのとった非常措置も理解できないことではない。ただし、大切なのは、双方の視点での考察である。そこで、今回はアボリジニの視点で考えるという活動を仕組むことにした。

移住者たちの「当たり前」とアボリジニたちの世界での「当たり前」が違ふことによって生じた数々の衝突。そして、それは移住者たちのものの見方・考え方の押しつけにより、アボリジニたちの迫害へとつながっていった。

そういった経緯を理解した上で、「もし自分がアボリジニだったら、どんなことを考えたか」を話し合わせた。

その後、今の自分たちの生活は、白人側とアボリジニのどちらに近いだろうか、と問い掛けてみた。難しい問題ではあったが、「豊かな共生社会を目指すために、自分たちができることは何か」について考えるきっかけになったと思う。

(授業後の感想より)

- もともと私たちが住んでいたところにやってきて、私たちを差別するなんて悲しいことだな。
- いきなりこの土地をのっとられた気持ちをわかってほしい。
- 白人たちは私たちにとっては、やばんで、私たちの考えていることを理解してくれない。なんで平等にできないのかわからない。
- この土地はだれのものでもないはずだ。～アボリジニが土地を共有するという考え方から～
- この人たちが来たおかげでふつうの生活ができなくなった。簡単に人を殺したり、自然を破壊したりするのはなぜだろう。仲良くしようよ。もう殺し合いはやめようよ。
- なぜみんな一緒に住んではいけないんだろう。どうして自分第一の生活をするんだろう。私たちは変なことをしているわけではないのに。
- 自分たちのことを理解してほしいのなら、アボリジニのことも理解してほしい。みんなが平等に暮らしたい。私たちのことをわかってくれるのなら、一緒に暮らしたい。

⑤ 「難民」(6年道徳・総合)

授業の最初に、難民についてのイメージを自由に出してもらった。

(生活が苦しい民族・貧しい人たち・差別されてる人たち・国から追い出された人・働けない人・住むところのない人・苦しんでいる人たち・危険な人たち・見知らぬ人たち・不自由な人たち・苦勞して生きている人たち・ふつうの暮らしができない人たち・戦争などがおこっている所で暮らしている人たち・ほかの国から来て差別されている人たち・路上で暮らす人たち・アフリカやイランやイラクの人たち・あやしい人たち・こわそうな人たち…)